

わが町

わが町、わが店、この道一筋。出逢いとコミュニケーション あかい新聞店ホームページ <http://www.akai-shinbunten.net> <発行所>あかい新聞店 武豊店/知多郡武豊町字金下37番地 ☎<0569>72-0356 常滑店/常滑市市場町4丁目167番地 ☎<0569>35-2861 企画・制作：株式会社 新聞ビル

瑞雲殿
誠意と真心で…あんしんのかげはし
CSK葬祭
0120-33-5909
TEL 0569-35-2785
FAX 0569-35-2296
24時間
体制完備

葬儀専用ホール

運命を変えたロサンゼルス
ヴァイオリニストの川畠成道さんは、8歳の時に目が不自由になってからヴァイオリンをはじめ、40歳のいま、円熟した演奏を国の内外で披露している。

川畠さんの演奏を聴いた。最初の1音目から、すーっと心の中に音が染み込んできた。優しい、素直な気持ちに自然になれる演奏だ。

8歳の時、滞在中のロサンゼルスで風邪をひき、飲んだ薬の副作用で、ステイプルス・ジョンソン・シンドロームといわれる病気になった。40度近い高熱が数日続き、呼吸困難にも陥った。全身の皮膚が水膨れになった。生存率5%と言われた。

皮膚や粘膜だけでなく、眼球にも炎症が起きた。奇跡的に一命は取りとめたが、目が不自由になった。完全失明ではないが、見え方としては、「分厚いすりガラスを通して見ている感じ」だそう。というより、そこまで回復したというのだ。最近、病院で2度にわたり、口腔の粘膜を角膜に移植する手術を受け、ここまで見えるようになった。



元気のでてくる”ことばたち”

169

村上信夫

心の声が聞こえた
父は、オーケストラのコンサートマスターも務めるヴァイオリニストだった。音楽の道の厳しさを知っている父は、「プロにもなら

は、「自分はヴァイオリンが好きなんだ、音楽が好きなんだ」という自分の内なる声を聞いていたからだという。目が不自由な川畠さんは、研ぎ澄まされた聴覚で、敏感にいろんな音を聞き分けてきたが、自分の心の声にも耳を傾けられたのだ。

99年、英国王立音楽院を首席で卒業。

内なる声に耳を傾ける ～ヴァイオリニスト 川畠成道さん～

ないのに、幼い時から教える必要はない」と、ヴァイオリンに触らせもしなかった。しかし、川畠さんが、目が不自由になったことで、目に頼らず、耳で学べるヴァイオリンを10歳から始めさせることにした。職業にするため学ぶには、遅いスタートだった。

だが、「98年に日本でデビューするまでは、冬の時代だった」と、川畠さんは振り返る。何度も絶望を味わった。ほかの人に出ることが簡単に出来ないもどかしさ。必然的にソリストを目指さざるを得なかったわけだが、果たしてなれるのかという不安。英国国立音楽院に留学中、世界的コンクールに応募して、セミファイナルで落選し、落ち込み、出口のない暗いトンネルに入りこんだ気分にもなった。

しかし、それらを乗り越えられたの

■村上信夫プロフィール

2001年から11年に渡り、『ラジオビタミン』や『鎌田 實いのちの対話』など、NHKラジオの「声」として活躍。この4月からは、全国を回り「嬉しい言葉の種まき」をしながら、文化放送『日曜はがんばらない』（毎週日曜10:00～）、ABCラジオ『osaka歴史ロマン』（毎週月曜18:35～）、月刊『清流』連載対談～ときめきトークなど、新たな境地を開いている。

1953年、京都生まれ。元NHKエグゼクティブアナウンサー。これまで、『おはよう日本』『ニュース7』『育児カレンダー』などを担当。著書に『ラジオが好き!』（海竜社）『ことばのビタミン』（近代文芸社）『いのちの対話（共著）』（集英社）など。

帰国して、最初のCDもリリースし、年間100回のコンサートをこなすようになった。しかし、「考える余裕もなく、ただ機械的に演奏をこなす自分に疑問がわいた。「いつも同じ演奏をしていていいのか」。

そこで、また内なる声に耳を傾けた。「なぜ、そのステージで演奏するのか、いつも自問自答してから演奏しよう!」と内なる声が答えた。

コンサートにテーマを置くことにした。家族向けのコンサート、ソナタシリーズ、クライスラー連続演奏…。

これからは、バッハの無伴奏に挑戦しようと思う。「バッハは、自分にとつて、大きな存在。バッハが自分の音楽の基本。バッハの楽譜には、あまり情報書き込まれていない。だから難しくもあり、やりがいもある」。無伴奏全曲演奏が目標だ。

人生を豊かにした結婚

2007年9月、知子さんという伴侶を得た。知子さんも、4歳から趣味でヴァイオリン習っていて、30歳すぎでから、また専門的に勉強を始めていた。川畠さんのコンサートにも、時折足を運んでいた。出会いは、またまた因縁のあるロサンゼルスだった。日本から、わざわざ聴きにきた知子さんと知り合った。「彼女の明るくて素直な声に恋した」という。最近、視力が少し回復して、彼女の輪郭がわかるようになった。その印象を問うと、「大丈夫でした」との答えに大爆笑した。



俳画／イネ・セイミ

ラジオが好き!

村上信夫

好評
発売中



■イネ・セイミプロフィール

フルート奏者として活躍中。俳画家。絵画を幼少より日展画家の（故）川村行雄氏に師事。俳画を華道彩生会家元（故）村松一平氏に師事。俳画の描法をもとに少女猫等を独自のやさしいタッチで描いている。個展多数。

俳画教室開講中

ところ 常滑屋
とき 月二回 第二・第四金曜日
午後一時～三時
会費 一回 二、二五〇円（三ヶ月分前納制）
問合せ ☎〇五六九三三〇四七〇

インディアンフルート教室
開講しました。
誰でもすぐに吹けます
入会受付中!!

何か始めたいと
思っている貴女へ。
数年後、素敵に
フルートを奏でる姿が
そこにあります。
楽しく個人レッスン
致します。

講師 イネ・セイミ
（フルート奏者 指導歴30年）
1レッスン・1時間5,000円（ティータイム付）
申込み
お問合せ 0569-89-7127
seimine@oasis.ocn.ne.jp

慈愛の人・良寛(89)

杉本武之

良寛と宮沢賢治(その10)

『法華経』について(2)

良寛が托鉢の道すがら『法華経』を誦誦していたことは、次の詩を読めば分かります。

「托鉢して此の地に來たる、涼秋八月の秋。園は疎にして栗刺見れ、天は寒くして蟬声収まる。我が性嗜む所無く、起坐思ひ悠悠たり。八軸の法華経、巻舒す胡床の頭」

（大意）托鉢をしながら、この土地にやって來た。涼しい8月(旧暦の秋のことだ。庭の木立はまばらで、栗のいがが大きくなりあらわに見えた。寒くなり、蟬の声も聞こえなくなった。私はもともと、これといった好みが無く、日々の生活もゆつたりとした思いで過ごしている。この日も、他にすることが無いので、私は腰掛けのそばで、8巻の『法華経』を広げたり巻いたり

して読経していた）

良寛に『法華経』に対する独自の解釈を示した『法華転』と『法華讃』の二作品があることはよく知られてい

ます。なかでも『法華讃』は、「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

「開口」(序)、百の「讃」、

この指とまれ (200) 氏原朝信

「班別新聞」と学級通信・文集「スクラム」(6)

班長になった思い出

I・A女

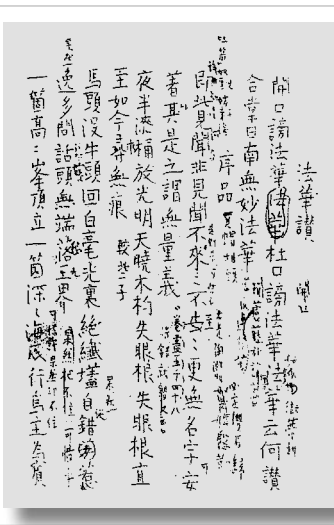
五・六年生になって私は何度も班長になりました。五年生の二学期に、はじめて班長になりました。その時は自分でやろうと思っただけではなく、先生が決めました。それはきつと私が一度も班長になったことがなかったからでしょう。私が先生に選ばれたとき、班長としての責任がはたせるかなと考え込んだり、学校にいくことがこわかったです。学校に來ると、班長が班での出来事を中心にいろいろとやり遂げなければなら

らないからです。今は、自分からやろうとして班長に立候補をしたりしました。私が選んだ子や男子は、私の班にきてくれたので心からうれしく思いました。(略)

班長になつての思い出は班の中であんな、力を合わしてのボートボール試合、給食の時など、ゆかいでゆかいで笑いながら過ごしたことが思い当ります。結局、今になってみれば五年生の二学期に班長になったのがなぜ、こわかったのか、不思議に思えます。五年生の私、六年生の私は

掌して曰く、南無妙法華

（大意）口さきだけで法華経をどのように讃えても、真実を言い尽くせず、かえって法華経を誇るようになる。また黙つたまま、心のうちで法華経を讃えて



良寛の『法華讃』

も、口さきだけと同じ結果となつてしまふ。それでは、いったいどうしたら法華経の真実を讃えることになるのか。両手を合わせて「南無妙法華」と唱えるだけでいいのだ」

②「方便品」

良寛は「方便品」に対して11篇の「讃」を作りました。最も多い数で、良寛がこの品をいかに重要視していたかが分かります。「方便品」の中で、諸仏は

口を開いてもだめ、口を閉じてだめ。「開く・閉じる」という分別対立を超えたところで無心に「南無妙法華」と唱題することが、『法華経』を讃えることになるのです。

「勝手任運、只麼に過ぐ。困じ来れば眠り、飢え来たれば飲もう。唯だ此の一事も也た要せず。知らず何れの処にか二三を度せん」(大意)

私は、のほほんと成り行きに任せて日を過ごしている。疲れたら眠り、腹が空いたらご飯を食べる。ただそれだけだ。「仏乗がどうのこうのと大袈裟に言う必要はない。また、あの世のどこに渡って行くのか知らないし、知りたくもない」

良寛は、誰でも必ず成仏できるのだから、あれこれ理屈をこねずに、造作を離れ、直下に自己そのものを自覚すればいいのだ、と

と、ぼくがさがして全部食べ

それがわかると、妹はぼくをく

きにくる。そんなときは、ぼくがやはり弟のよう

だ。上

の妹は、何かと文句を

つけにくるけど、一番下の妹は、文句を言わない。ぼくは新聞配達に行くとき

一番下の妹はついてくるとい

うけど、上の妹は、「新聞配達なんかおもしろくねえ」といつてついでにこ

いぐらにくたしくても妹は二人ともかわい

い。憎くても、かわいい妹のためにかわいがつてあげる姿が目

に浮かびます。

わたし

の家族

N・K男

ぼくの妹は二人いる。妹が上

みたくて、ぼくが弟みたい

だけれど、ぼくが兄だ。だから、妹は妹。

おやつは、いつも妹が多く

くてぼくが少ない。妹が食べ

べきになくてしまつておく

と、ぼくがさがして全部食

べてしまふ。それでは、い

ったいどうしたら法華経の

真実を讃えることになる

のか。両手を合わせて「南

無妙法華」と唱えるだけで

いいのだ」

「方便品」

良寛は「方便品」に対して

11篇の「讃」を作りました。

最も多い数で、良寛がこの

品をいかに重要視していた

かが分かります。「方便品」

の中で、諸仏は

と、ぼくがさがして全部食

べてしまふ。それでは、い

ったいどうしたら法華経の

真実を讃えることになる

のか。両手を合わせて「南

無妙法華」と唱えるだけで

いいのだ」

「方便品」

良寛は「方便品」に対して

11篇の「讃」を作りました。

最も多い数で、良寛がこの

品をいかに重要視していた

言っているのです。

③「五百弟子授記品」

良寛は「五百弟子授記品」に対して4つの「讃」を作りました。この品には有名な「衣裏繫珠の譬喩」が出てき

ます。釈尊から将来の成仏を保証されて喜んだ五百人

の弟子たちが、その喜びを譬喩の形で、次のように釈

尊に告げます。

「ある人が、親友の家に

行って、酒に酔って眠って

しまふ。親友は仕事のため

に外出する。その時、眠っ

ている友の衣の裏に、無上の

価値のある宝珠を繫けて立

ち去る。酔いから醒めると

その人は他国へ行って働き

始めた。彼はずっと苦しい

生活を送った。やがて親友

が、この困窮している友と

再会する。友の貧窮ぶりを

見て驚き次のように言う。

「無理をして働かなくて

もよいように、高価な宝を

衣のうちにひそませておい

た。今もそれはあるはずだ

ないし、知りたくもない」

良寛は、誰でも必ず成

仏できるのだから、あれこ

れ理屈をこねずに、造作を

離れ、直下に自己そのもの

を自覚すればいいのだ、と

満足できるはずだ」

良寛の「讃」は次のよう

です。「億い得たり二十年、資生

太だ艱難なりき。ただ衣食

の爲の故に、貧里に空しく

往還せり。路に達道の人に

逢えば、苦るに旧時の縁を

説く。却いて衣内の宝を見

れば、今において現に前に

在り。これより親しく受用

し、日夜ほしきままに周旋

す」(大意) 20年前のことを

思い出してみると、日々の

暮らしは大変苦しかった。

ただ衣食の資を稼ぐため

に、貧乏な村里を右往左往

していた。途中で道に達し

た人に会った。彼は、はる

か昔に高価な宝珠(仏性)が

私に授かつている因縁を説

明してくれた。退いて、衣

内の宝を探して見たら、今

もちゃんとあった。これよ

り後は、身近にこれを受け

入れて我がものとし、日夜

自由自在に活用してきてい

る。今もそれはあるはずだ

ないし、知りたくもない」

良寛は、数ある菩薩の中

で、常不輕菩薩を一番敬愛

していました。鎌倉時代の

日蓮も、この菩薩の姿に我

が身をあてて諸難を凌い

た後で、良寛は「閑筆」(欄筆

と同じ)を書き添えました。

「我れ法華讃を作る。すべ

て一百。羅列してここに

在り。時々、須らく熟視す

べし。視る時、容易にする

ことなかれ。句々に深意有

り。一念、もし能く契わば、

直下に仏地に至らん」(大意)

私は法華讃を作った。す

べてで一百二篇。ずらりと

ここに並べてみた。いつも

いつも熟読してほしい。上

の空で読んではいけない。

一句一句に深い意味が込め

られている。一たび声を立

てて読み、法華経の真意に

びたりとすれば、そのまま

仏の境界に到達したことになる」

良寛の「讃」は次のよう

です。「或いは瓦石を投げられ、

或いは枕木を。避け走り、

遠くにとどまって声高に唱

う。此の老、一たび去って

消息無し。夜來の風月、誰

が為にか淨き」(大意) この

菩薩は、四衆から瓦石を投

げつけられたり、枕木でた

たかれたりした。すると避

難して遠くの方で立ち止

まり、高い声で「あなたた

ちは仏になります」と唱えた。

常不輕老がこの世を去つ

て、もう何の便りも聞くこ

とができなくなった。しか

し、夜來の風月はいったい

誰のおかげで、その浄らか

さを現じているのであろう

か) ⑤「閑筆」

すべての「讃」を書き終え

た後で、良寛は「閑筆」(欄筆

と同じ)を書き添えました。

「我れ法華讃を作る。すべ

て一百。羅列してここに

在り。時々、須らく熟視す

べし。視る時、容易にする

ことなかれ。句々に深意有

り。一念、もし能く契わば、

直下に仏地に至らん」(大意)

私は法華讃を作った。す

べてで一百二篇。ずらりと

ここに並べてみた。いつも

いつも熟読してほしい。上

の空で読んではいけない。

一句一句に深い意味が込め

られている。一たび声を立

てて読み、法華経の真意に

びたりとすれば、そのまま

仏の境界に到達したことに

なる」

良寛の「讃」は次のよう

です。「或いは瓦石を投げられ、

或いは枕木を。避け走り、

た後で、良寛は「閑筆」(欄筆

と同じ)を書き添えました。

「我れ法華讃を作る。すべ

て一百。羅列してここに

在り。時々、須らく熟視す

べし。視る時、容易にする

ことなかれ。句々に深意有

り。一念、もし能く契わば、

直下に仏地に至らん」(大意)

私は法華讃を作った。す

べてで一百二篇。ずらりと

ここに並べてみた。いつも

いつも熟読してほしい。上

の空で読んではいけない。

一句一句に深い意味が込め

られている。一たび声を立

てて読み、法華経の真意に

びたりとすれば、そのまま

仏の境界に到達したことに

なる」

良寛の「讃」は次のよう

です。「或いは瓦石を投げられ、

或いは枕木を。避け走り、

遠くにとどまって声高に唱

う。此の老、一たび去って

消息無し。夜來の風月、誰

が為にか淨き」(大意) この

菩薩は、四衆から瓦石を投

げつけられたり、枕木でた

たかれたりした。すると避

難して遠くの方で立ち止

まり、高い声で「あなたた

ちは仏になります」と唱えた。

常不輕老がこの世を去つ

て、もう何の便りも聞くこ

とができなくなった。しか

し、夜來の風月はいったい

誰のおかげで、その浄らか

さを現じているのであろう

か) ⑤「閑筆」

すべての「讃」を書き終え

た後で、良寛は「閑筆」(欄筆

と同じ)を書き添えました。

「我れ法華讃を作る。すべ

て一百。羅列してここに

在り。時々、須らく熟視す

べし。視る時、容易にする

ことなかれ。句々に深意有

り。一念、もし能く契わば、

直下に仏地に至らん」(大意)

私は法

新シリーズ ヒューマンライフ

『新・現代家庭考』 就職

— 自分ドラマつくろう — (19) 岡田 清治

結婚

前島と恵美の間に見えないカーテンが張られていると、前島は感じだしていた。恵美は心の中を覗かせない。本心がつかめない。

「ただいま」

「おかえり」

「すぐに食事の用意をしますから少し待ってね」

「ああ、…」

食事を終えた二人はソファーに座りテレビを見たが、しばらくして電源を切った。

「恵美はいまの生活で満足しているのか」

「のっけから難しい質問をされるのね」

「いやね、将来をどう考えているのかと思って…」

「悩ましい質問ね」

「そうか、どうも半導体業界の雲行きが怪しくなる予感がするのだ」

「そうなの、日本は世界一のシェアを誇っていると言われているのではないの？」

「いまはそうだよ。だけど研究の最先端から見ていると、確実に衰退傾向を感じる。会議でも五、十年先の議論をしているが、明らかにその予兆は出ている」

「保さんの会社は半導体から撤退するの？」

「ほとんどの社員は降々と感じているが、研究グループの上層部は強い危機感を抱いている」

「それならその原因を突き詰めて解決策を考えればいいのでは？」

「その原因がわからないというか、それぞれの見方がバラバラなんだ。トップはきわめて楽観的なんだ」

「あなたはと思うの」

「マーケティングをやっているのだから、ライバルとくに韓国のサムソンのマーケティング部隊は当社の二〇、三〇倍の人数をかけている。さらに増員傾向にある」

「どういうことなの」

「日本の半導体メーカーは技術に自信を持っている。その技術でアメリカを凌駕してきたサクセスストーリーから抜け出せない」

「世界の市場に変化があると言うの？」

「そうだよ。中国市場でも精度や品質、容量のニーズはピンからキリなんだが、日本はピンの上さらに超高精度品質のモノしか目に入らない。そうすると、半導体の製造装置のメーカーもそれに合わせざるを得ない。当然、装置の値段は上がる。ということは最先端の分野では勝負ができるが、一番市場の大きい汎用品の市場では価格の安い半導体がシェアを取っていくのだ」

「日本の半導体メーカーも価格の安いものをつくれればいいのでは？」

「そこなんだ。一度、高精度のものをつくったら下げられないのだ。変なプライドのようなものが、じやまをするからだ。ユーザーから二級品をつくっているとレッテルを張られるのが怖くて、品質を落としたものに手を出せない」

「わかるような気がする」

「サムソンは膨大な人数をそれぞれの市場に送り込んで、どの程度の精度と品質を求めているか、細かく市場調査をしている。そして市場に合わせた生産ラインでつくっていると聞く」

「インドで数万円の自動車が開発されているという情報もあるわね」

「そうなんだ、日本の自動車は燃費がいいとか、内装が豪華だというこ

とで、高くても売れるが、インドのように発展途上国では極端な話、動けばいいというニーズが大半だ。半導体も同じで機能

品質よりも価格の安いものを求めている。しかも携帯電話一つとっても、めまぐるしく変わっている。通信会社にしたら携帯そのものをゼロ円にしても、通信費で稼げばいいという判断をする。だから携帯向けの半導体はどんどん下がりに続けている」

「その繰り返しならいつかは行き詰るね」

「会社のトップは本当のことはわかっていると思うが、自分の時に大きな変化を起こしたくないので、問題や課題を先送りしている」



太平洋上のカツオドリ(著者撮影)

※この物語に対する読者の方々のコメント、体験談を左記のFAXかメールでお寄せください。今回は「就職」「日本のゆくえ」「結婚」「夫婦」についてです。物語が進行する中で織り込むことを試み、一緒に考えます。

FAX… 0569-34-7971

メール… takamisuu@akashi-shinbun.net

■プロフィール

著者… 岡田清治(おかだせいじ)
一九四二年生まれ ジャーナリスト
(編集プロダクション・NET108
代表) 著書に『心の遺言』

『あなたは社員の全能力を引き出せますか!』
『リヨンで見た虹』など多数

「保の会社はどうなるの？」

「すぐに、どうなるということはないと思うが…」

保は会社の先行きに不安を感じながらも、新しい一歩を踏み出すことに決断できない。というよりも具体的な考えがないから心配だけを引きずっている。

「恵美の会社も半導体を扱っていると思うが、どうなの」

「部門が違えばまったくわからないのよ。機会があれば、聞いてお

くわ」

「いずれにしても楽観は許されない時期がくると思う」

「その時は、どうするの」

「いまはわからないよ」

夫婦の将来については切り出せない。子宝に恵まれないことが一層、保を不安にしていたが、どうなるか天に任せるしか仕方がない。専門医は精液を持参しろと言った。近く検査することになっているが、結果が怖くて躊躇している。

先に風呂に入った保は寝室のツインベッドに潜り込み、そのまま眠りに入ってしまった。

その後もルーティンな生活が続いた。

新入社員の実験と毎日のように得意先に出かけた。

「どう、面白い？」

「まだ、覚えることが多くて、面白いかどうか判断できません」

「そら、そうだな。技術マーケティングと言っても、相手が何を求めているかは企業秘密だからなかなかわからない。結局、人間関係から信頼を得て次のターゲットを知ることしかない」

「得意先と共同研究はしないのですか」

「ほとんどない。得意先企業は新製品の開発研究はするが、半導体メーカーはそれに合わせたモノを提供すればいいと考えている。もちろん、最終段階では両社で打ち合わせはあるが、当然、ライバルにも声をかけているので、できるだけ早く情報をつかんで研究開発グループに上げないと、競争に負けるのだ」

「こちらから提案することはないのですか」

「そこなんだ。いまのような部隊ではとてもできない。しっかりとマーケティング組織を持たないと対応できない。会社は技術力に自信をもっているの、いいもの、性能や品質の高いものがつくれたら、売り先はいくらでも広がるという考えに凝り固まっている」

「そういうことならマーケティングの担当者のやる気が減退しません」

「実際は一度、取引が始まったら継続されることがほとんどだよ」

「そうですか」

得意先を出て喫茶店で休憩しながら雑談を交わすことも増えた。新入社員の歓迎会が近づいてきたので、天野に予定を確認した。

「その日は大丈夫です」

「何か習い事でもしているの？」

「英会話の教室に通っています」

「そうか。海外に行きたいのか」

「これからの時代、国際化がますます進むのではないかと、せめて英語だけでもマスターしようと思っています」

「国際化ね」

保は女房が商社に勤めていることを言おうとしたが、なぜか瞬間的に口をつぐんだ。ひょっとして潜在的に天野と付き合いたいという願望があるからかもしれない。

「前島課長は海外に興味ありません？」

「そうだな、旅行ならいいが、仕事ではね」

「そうですか」

天野は期待はずれの顔をのぞかせた。

「技術研究なら欧米に研究所もあるのでいいが、マーケティングではほとんど海外に行くこともない。行っても営業のお伴で短期間の出張だけだ」

「やはりこれからは自社で海外市場を開拓しないといけないのではないですか」

「その通りだが、技術最優先のポリシーだから力を入れない」

「単に商社任せの輸出では、国際化の波を乗り切れないと思います

が、前島課長はどう思います」

再び、恵美の姿が浮かんだ。女性は海外に目を向けているが、男は内向きになっているのかと、天野の思いを聞いてそう思うのだった。

家路について。

恵美はなぜ、結婚したのか。女性が結婚するのは「子どもがほしい」からではないのか。恵美に聞いたことはないが、保は当然だろうと考えていた。だが、恵美から子どもの話が一度も出てこない。むしろ夫婦生活を避けているように感じる。とにかく商社での仕事が面白いのか、家においても仕事の構想を練っている。

このままいけば、二人の人生はどうなるのだ。自問するが解答はない。

子どもはいる夫婦はいる。不妊症ということは考えられる。日本でも不妊症は増えていると聞く。原因は男女それぞれに欠陥がある場合と、双方が原因の場合があるようだ。体外受精の技術も発達しているが、精子が問題だということも少なくない。

前島保は意を決して以前訪れたクリニックからもらった小さな容器に精液を入れた。口が小さかったのでコンドームから移した。一週間後、検査結果を聞くためにクリニックを訪れた。

「おかしいですね」

老練な顔立ちの医師はげんな表情を見せる。

「どうしてですか」

「一瞬、保は不妊者と宣告されたと思った。

「あなたは精液をなにかで移しましたか」

「ええ。容器の口が小さかったからコンドームにとって移しました」

「そうですか。実はコンドームの内側には精子を殺す薬剤がぬつてあるのです」

「本当ですか」

保は絶句して医師の顔を凝視して金縛りにあったように動けない。

「あなたの年齢でおかしいと思ったのです」

「では後日、もう一度、持参しますので検査をお願いします」

恥ずかしくてクリニックから逃げるように出た。その後、再検査をしてもらったら、精子は正常であることが告げられた。

「もう結婚して三年近くなりますが、子どもに恵まれませんか。両親から孫の顔を見たいと催促されますので検査を受けたのですが…」

「不妊症ということになります。奥さんが子宮内膜症だということも考えられますが、一度、検査をすめられたらどうですか」

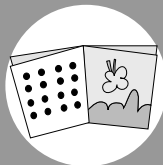
「はい」

「前島さんのところは奥さんも働いておられますね。夫婦生活はうまくいっていますか」

保は痛いところをつかれた。

「時々ですが…」

(続く)



絵本と私

杉浦 千代子



どもにと願いながら、日々精進していますが、何故こんな気持ちになれたのかは、もう何十年も前のこと、止揚学園々長、福井達雨さんの、こんな言葉に出会ったからです。

「心の中に燃える人間のふる里を持たせてやりたい。見えないもの、美しいものを直感し感動する心や、ありのままの姿で何にも、恐れず、自分からぶつかって行く、強さ、熱さ、静かな心のよろこびを持たせてやりたい。」何んとすばらしい言葉ではないでしょうか。子ども達を、こんな眼差しで見たいこう、子どもの目線に立つて、物事を見つめていこうと決意させてくれた一言です。

読書活動が続けていると、時として、絵本作家の方達と、御一緒させて頂くことがしばしばあります。

昨年亡くなられた、長谷川摂子さんが「人間の芯になるプライドは競争や比較では育たない。あなたは世界でたった一人のかけがえのない存在。あなたがいることで周囲の私たちは幸せになれる、という大人の無償の愛情を子どもに絶えず感じさせなければそれは育たない。そのことが後で子ども達にも社会にも大きな収穫となる」と教えて下さいました。私のこれからも、大好きな子ども達の幸せを願いながら、大好きな絵本と共に過ごしてまいりたいと思っています。

杉浦千代子さんは、西尾市を中心に活動している読みきかせの会「水曜おはなし会」の代表を務めてみえます。この会は、その活動が高く評価され、昨年、「緑授褒章」を受けられました。

「とんと昔、ある所に……」で始まるおきまりの昔話を、母は針仕事をしながら、隣近所の子ども達や、私達兄妹によく語ってくれました。皆んなニコニコしながら、目を輝かせながら聞き入ったものです。

中でも一寸法師のお話には、清水寺で鬼を退治して、打ち出の小づちで大きく成って、お姫さまとハッピーエンドで終わりますが、「おわんの船に簪のかい……」の昔物語歌を歌って大満足したものです。

金太郎、桃太郎、浦島太郎の三大太

郎話や、色々と昔話には歌があつて、小さな子から大きな子ども達と一緒に歌って歌って、話の筋がよく理解出来たと思います。

私が生まれた頃から、日本は戦争への道に進み始めておりましたが、まだその当時は、ほとんどの人達が、多くの人命や財産を失って、敗戦を迎えるなど、考えてもいなかったと思います。我が家は、九人兄妹の大家族、私は下から三番目として生まれてましたから、服から帽子など、何から何までお下がりばかりでした。

そんな中に絵本やマンガ、雑誌がありました。講談社発行の戦国時代の英傑、秀吉や清正、又ぶんぶく茶釜、舌切り雀などの昔話がありマンガでは、「ふくちゃん」「のらくろ」「冒険ダン吉」などのお兄さんのお古、もっと古いもので、私のお気に入り「コードモノクニ」でした。

初刊は大正八年だそうですが、何ともモダンでスマートな一冊でした。

絵は武井武雄、岡本帰一、村山知義、初山滋などの一流の画家達で、当時まだ無名であった若い藤田嗣治、東山魁夷などの作品もありました。

詩や文章は、北原白秋、

野口雨情、西条八十、与田準一、小川未明、サトウハチローなどの一流作家の方々が書いています。

当時の編集者や、発行元である東京社の方々の子ども達への熱い思いが感じられる雑誌です。

全部が揃っていた訳ではありませんが、まだ、毎月出ていたので、時には新刊も目にしていたのかも知れませんが、大切な宝物を手にするように、それは、それは楽しみのひと時でした。

こんなこともありました。

母は、モダンなセーターの絵を見て、私達にセーターを編んでくれました。

近所のおばさん達が「可愛いいわ」と評判と成ったりしたこともありました。

詩の中からは、雨情の「あの町この町」「七つの子」「波浮の港」など、西条八十の「鞠と殿様」北原白秋の「アメフリ」など、色々な童謡が生まれていきます。これらも皆んなで楽しく歌ったものです。

一昨年、「コードモノクニ」の名作選が発刊されたので、なつかしい作品に又出会えることが出来ました。

戦争が激しく成ってくると、「少年倶楽部」などには、戦争で激しく戦っている場面が多くなり、世の中は軍国少年、少女の時代が変わっていききました。母の語ってくれるお話は、何時も何時も優しさあふれる、楽しいお話ばかりでした。

私が長女を出産し、「さてこの子を幸せにしてあげるにはどんなことをしてあげればよいのでしょうか」と母に問

うと「廻りの人達の温かな愛情は、勿論一番大切なことですけど、心の豊かな子にしてあげるといいわね」と「では心を豊かにするには、何をすれば」と重ねて問うと「心の中に豊かな泉を持たせてあげること、泉は自然に湧くものではなく、地下の水源を何かが刺激して湧き上がってくるものです。だから、この子の心の中に、優しい言葉をたくさん、たくさん掛けてあげるのよ、それには絵本があるでしょ。絵本は優しい言葉に、美しい挿絵があり、素敵でしょ。」

「絵本は手に取って見れる美術館ですよ。」と教えてくれました。

そんなで私の子育ては絵本と一緒に楽しいものでした。

市立図書館で主婦の方々が読み聞かせを始めました。

私も仲間に入って、もう30年近くになります。毎週水曜日には、図書館を訪れる子ども達が続いています。

活字ばなれや、読書ばなれが進んで国や文部科学省は、やっと子ども読書の日を作ったり各地の市町村も、子ども読書推進事業や、五ヶ年計画などを作って、子ども達への読書に力を尽くすようになりました。

西尾市でも、学校ボランティアさんが協力し読み聞かせや、図書館のお手伝いなどで多くの人達が、活動しています。

私もその中の一人として、小学校や保育園でのおはなし会を続けています。子ども達の輝く目の中に心豊かな子



カット 杉浦 大 介

